

学生寮での生活あれこれ

インド人の家庭で三週間のホームステイを体験した後、学生寮に移ることになった。新学期をとうに過ぎた11月という時期でもあり、寮には空部屋がなかった。ビハール州のパトナから来ていた政治学専攻のラタが、好意でルームメイトとして受け入れてくれた。

広大で緑豊かな大学構内の一角にある女子学生寮は、3mはあろうかという高い壁に囲まれ周囲を圧倒する。正門には、頑丈で大きな鉄の扉で閉ざされ、端の方に開いている潜り戸から



東方研究会専任研究員

清水晶子

出入りする。人の出入りに関するチェックは厳しく、常時門番が詰めている。そして、門番は夜中も寮内を見回り、決して警備を怠らない。来訪者は備え付けのノートに氏名、住所、そして入出の時刻を正確に記帳しなければならぬ。女性は部屋まで自由に出入りできるが、たとえ父親であっても男性は寮の建物内に立入ることは許されない。そういうわけで、男性の来訪者は呼び出し係に頼んで、キャンティーンとよばれる寮内の青空喫茶店で相手を持つことに

なる。面会時間は夕方7時までと決められていた。

とりわけ門限に関しては厳格だった。平日は9時、土曜日は10時、そして月に2回だけ11時まで認められていた。ただ奇妙なことに、前もって届けを出しておけば、相手方のサインだけで外泊はいつでも自由だった。デリー大学のあの場所は、北のオールドデリーに属し、中心街から車でも30分はかかる。厳しい寮の門限もあって、残念ながら留学中には、夕方から催される演奏会や古典舞踊を見る機会はほとんどなかった。二年間とはいっても、①寮監に呼び出されるようなことはなかったものの、がんじがらめの規則の中、「旅行のための長期の外出許可をめぐって寮監ともめることもしばしばだった。今考えてみると、もう二度とインドでは寮生活を送る自信はない。

寮の女子学生達は、暗くなる前に戻り、食事

の内容の貧しさの点以外は、特に不満を感じている様子もなく、まさに「カゴの鳥」のようにみえた。このような制約は外からみると、はじめは非常に理不尽に思える。それは、一般にインド人同士の間で自分の属するコミュニティー（カースト集団）やその成員以外に対しては一定の距離をおいて、お互いに信頼しないことに原因があるように見受けられた。人々はそれぞれのコミュニティーで定められたルールを守っている限りは安泰でいられるし、外の世界は危険と考えている。寮のあの鉄扉がそれを象徴しているように思えた。

一留学生であった私も、N教授が紹介して下さったおかげで、はじめからインド人の家庭で難なく受け入れていただいた。その中で私にもある程度ルールを守ることが要求される。多少の息苦しさを感ずるとしても、ひと度コミュニティーに受け入れてもらえると、全面的に保護

されているという安心感は常にあった。

寮では四棟の建物に三百人ほどの学生達が寝食を共にしていた。寮生の世話をしてくれる使用人の方も大人数だった。インドでは、カースト制によって職業別の仕事分担がはっきり決められている。決して他人の仕事には手を出そうとしない食堂係、門番、洗濯屋、清掃人、などがあって、身の回りのことは全て使用人まかせにできる。

懐かしく思い出すのは、私達の階の清掃全般を受け持ってくれていたフィロージーのことである。彼女は朝食から戻って来るのを見つけると、すぐにやって来てクレゾール液に浸した雑巾で、部屋の石の床を丁寧なふいてくれた。まず気がついたのは、戸口で必ずゴムぞうりを脱いで部屋に入って来ることだった。時たま、砂糖と牛乳をたっぷり入れた紅茶を彼女にもふるまうこともあったが、決して私の部屋では紅

茶を飲むとしなかった。

インドでは、清掃を職業とするカーストは最下層に属し、今でも上位カーストの者が直接そういう人々に触れることはタブーとされ、共食はしない。日常生活の中でも、浄・不浄の觀念が徹底してゆきわたっていて、あたかも人間性まで、それで決められてしまっているかのようだった。このかたくなな「こだわり」は、日本人にとって理解をはるかに越えている。

私が外国人だという気安さもあったのだろう。フィロージーはそうじの後、私の部屋で話をしていくことが多かったが、私のヒンディー語ではだいたいの内容しかつかめなかった。陽気でよく働く、気のいいおばさんだった。彼女は今もあの寮で、黙々と床ふきの仕事をしているのだろうか？もう一度彼女からいろいろな話を聞いてみたい。